

〔査読論文等〕

【研究論文】

1. 社会福祉実習導入教育におけるメンター配置の意義
—受講生に対する、教員を比較対象としたアンケート調査から—
二本柳 覚（高知県立大学）

〔特集Ⅰ：学会指定研究 「社会福祉学教育評価」〕

1. 「社会福祉教育の評価は如何になされるべきか」
担当理事：宮嶋 淳（中部学院大学）・杉山克己（青森県立保健大学）
2. 「教育評価とは何か」
宮嶋 淳（中部学院大学）
3. 「保育学教育における評価」
平澤一郎（長岡こども・医療・介護専門学校）
4. 「教育評価に関する調査報告」
宮嶋 淳（中部学院大学）
（資料：調査票）
5. 「保育士養成における、ルーブリックを活用した教育評価
—学生による実習・学外活動の自己評価票の作成—」
平澤一郎（長岡こども・医療・介護専門学校）
6. 「社養協加盟校の3つのポリシー分析」
宮嶋淳（中部学院大学）・平澤一郎（長岡こども・医療・介護専門学校）
7. 「『費用対効果』からみて社会福祉教育はどのように『評価』されるのか」
宮嶋 淳（中部学院大学）

〔特集Ⅱ：2015年度日本社会福祉教育学会第11回大会報告〕

第11回大会の概要及び開会式

第1部 学会企画シンポジウムⅠ

「学生の教育ニーズに対応したソーシャルワーク演習の教材・方法・教授法の総合的検討」

（シンポジスト資料）

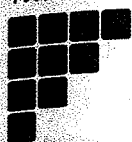
川島 恵美（関西学院大学）
片岡 靖子（久留米大学）
大山 博幸（十文字学園女子大学）

第2部 学会企画シンポジウムⅡ

「実習『前』評価システムの検討とOSCEの試行」

（シンポジスト資料）

巻 康弘（北海道医療大学）
松岡 是伸（名寄市立大学）
嘉村 藍（仙台白百合女子大学）



教育評価とは何か

宮嶋 淳 (中部学院大学)

I. はじめに

関(1990)は、評価を次のように定義している¹⁾。

評価とは、プログラムや行為、個人の持つ価値やそれらのインパクトに関する判断と、判断を行うプロセスに関する判断の両方を含んでいる。その判断は多くの方法によって達成できる。

また、大学教育の評価を「ある活動、目的、または実施計画の価値を決定するプロセスである。これらは目標の明確化、必要な情報の収集とそれに基づく意思決定の3つの段階」からなるとしている。つまり、大学教育の評価とは、「教育的活動とその目的・目標、それに基づいてなされる教育の実施計画がどのような価値をもっているのかを決定する過程」であり、教育評価の構成要素は①誰が(評価主体)、②何を(対象)、③何のために(目的)、④どのように(方法)、⑤どのような時期(時間間隔)に行うのか、が含まれると指摘した。この指摘を基点として、その後の教育評価がどのように展開して意義づけられているのかをみていこう。

II. 教育／人間／学校

「教」という漢字は、その語源において「大人が教え、これを子どもがなろう」という2つの意味が含まれている²⁾。「育」を自動詞として用いると「子どもが生まれ、大きくなること」となり、他動詞として用いると「親が子どもを産み、大きくすること」となる。これが転じて「養って善を為さしめ、率いて徳を成さしめる」ことを意味する。また、「教」と「育」、「おしえる」と「そだてる」という2つの行為には、時間的順序がある。そして大人を教師、子どもを生徒、両者の交流の場所を学校と考えるとその関係が明確にできる。

以下では、海原(1987)の『教育学』³⁾から「教育／人間／学校」について要約していく。

学校は、「一定の歴史的発展段階」の中で登場した

ものであり、親が子を「教育」する機能に何らかの支障が生じることにより登場する。それは、アリストテレスが「人間は社会的動物である」とあると語ってから永遠の人類、私たちの課題でもあり、宿命でもある。人間は只、人間的社会を通じてのみ人間になる。われわれは自ら所属する社会のもつさまざまな価値や規範を学び、またその社会にふさわしい行動様式を身に付けることによって、しだいに社会の構成メンバーになるのであり、社会の側にはどうしても彼を一人前の人間にする必要がある。この「彼の社会化の過程が教育であり、教育は社会の存続や維持のために不可欠の営為として継承されてきた営みである。人間は、未成熟な状態で生まれてき、未熟であるからこそ、学ぼうとする本性的要求をもつ生き物である。人間は、あくまで潜在する可能性への働きかけ、教育を媒介しない限り、一定の成長や発達を具体化できない。ベスタロッチ⁴⁾は「あらゆる人間教育は、人間に潜在する自然の、自己発展への要求に手を貸すすべに他ならない」と述べ、人間は環境に対して常に受け身的に反応するのではなく、しばしば能動的に働きかけ、成長しようとする。

教育と社会の関係を本質的に見抜いたデュルケイムは「万人にとって無差別な価値をもつ理想的で完全な教育は存在しない。教育は時代に応じた国家に応じて無限に変化する」と述べている⁵⁾。教育が絶えず変化している、時代や社会の要求に敏感に反応し、常に新しい装いで登場したことを物語る。これは、人間が自然的存在であると同時に、また歴史的・社会的存在であることによって説明されるのである。われわれ人間は、一生涯を通して家庭、学校、社会のあらゆる場所で、絶えず教育されているといえよう。あらゆる機会に様々な刺激や影響をうけるという意味で、われわれ人間は、取り巻く環境全体から教育される。教育とは、教えるものと教えられるものがあり、両者の相互作用を通して何らかの能力が

形成される。それをかつて親が子どもに為せていた。社会の変化はそれを親子の機能から社会の機能に展開し、社会が教育を為し、その教育には「到達目標」「達成課題」が明確にされている。海原がいう「教育／人間／学校／社会」の関係は、おおむね 21 世紀の今も妥当なのではないだろうか。

学校が登場する決定的な要因は、文化が一定以上の水準に達した結果、従来の家庭や社会の教育機能では充当しきれなくなったという点にある。従来、親子関係の中で教育が為されてきたし、それが各々の家の習慣であり、文化であった。そのようなマイクロレベルの伝承活動ではカバーしきれない量や質の文化を、時代の流れと社会の変化に即して、維持していくために、親から子に文化を授受するような場として発明されたのが学校である。ただし当然だが、学校には家庭教育とは異なる独自の性格や特色が構造的に存在する。学校には、①定まった時間割で継続的な教育が行われ、②プログラムがあり、③予め設定された到達目標を目指して計画的な活動が展開される、また④能率をよくし、⑤より大きな成果を収めるために合理的、技術的な手段や方法が駆使されるのである。さらに⑥マン・ツウ・マンの教育的関係でなく被教育者が大量に存在し、これを教授する教育者の側がそれ相当の資質＝専門性を求められるのである。

家庭で親が子に求めていた家に存在する伝承すべき文化を教育する教育機能が、社会の変化とともに暮らしが変化し、家庭では教育を担いきれなくなる。そこで社会の要請に即した教育機能として学校が登場したと考えられる。このように考えると学校は「社会的事実」であり、「社会的施設」であり、「社会的産物」であることを再認識しておく必要があるだろう。

Ⅲ. 教育評価とは何か

(1)教育評価の基礎概念

教育評価とは何かを問う時、「タイラー原理」を確認しておく必要がある。タイラー原理では、カリキュラム・授業・評価を一貫させるために、次の 4 つの問いを設定する⁹⁾。

①学校はどのような教育目標を達成するよう要求すべきか

②この目標を達成するためにどのような教育的経験が提供されるべきか

③これらの教育的経験はどのように効果的に組織されるべきか

④この目標が達成されたかどうかどのように決めるのか

タイラーの原理は、上記でみたとおり、教育には到達目標が必ずあり、教育が社会システム化した中での達成目標は、社会的な意味を帯びている。その社会的な意味を帯びた目標に到達するために如何なる教育を為すのか、それはどのように効果的に為し、達成を評価するのかという指摘である。

また、タイラーが 1930 年代に為した教育評価のための具体的な提案は次の 5 点である。

1、評価の規準は、教育目標である。

2、教育目標は、高次の精神活動を含む重要な目標群を含むべきである。

3、教育目標は、生徒に期待される行動で記述すべきである。

4、目標実現の度合いを知るために多様な評価方法を工夫すべきである。

5、もし、目標に未到達の子どもがいた場合には、治療的授業が実施されるべきである。

この提案は、「子ども」を「学生」と読み替え、われわれ大学教員にも省察的に活用できる指摘ではないだろうか。

教育評価を構造的に理解しようとするとき、その次元・目的・主体・対象を明確化していく必要があると田中(2010)は指摘している⁷⁾。まず田中は、カリキュラムには 3 つの次元があり、①意図したカリキュラム＝国や教育制度の段階で決定される内容、すなわち社会福祉士でいえば、科目とその科目のねらいと理解できよう。②実施したカリキュラム＝「意図したカリキュラム」を念頭に置きながら、学校や地域、担当する子どもたちの諸条件を勘案して、教育が実際に子どもたちに与える内容のこと、「子ども」を「学生」に読み替えて、各々の大学のカリキュラムやカリキュラム・ポリシーに適合しよう。③達成

したカリキュラム＝「実施したカリキュラム」を通じて、子どもたちが獲得する内容。これは教育目標とディプロマポリシーと呼応する到達度を測定することと理解できる。教育評価の構造は、大学教育にも通じる意味合いを有し、教育目標並びに3つのポリシーと相通じる。そして田中は「評価の主体」を①学生、②教員、③保護者、④行政・現場、⑤第三者機関であり、教育評価の機能を①診断的評価（＝入口）、②形成的評価（＝プロセス）、③総括的評価（＝出口）と示している。前記の（＝〇〇）は筆者が付記しているが、教育評価は、上記の3つのポリシーとつながる。そしてその循環であるといえる。田中がまとめた、教育評価の構造を現行の社会福祉教育をイメージし図示してみると次の図1のとおりである。

この図をみると、田中が指摘した評価の主体が網羅され、各々の主体が何を評価するのかその視点が明らかであろう。

大学評価という視点まで含めて考察する場合、田中のいう「教育評価の経営」という視点が重要となる。とりわけ「ハイ・ステイクスな評価」という概念に注目したい⁹⁾。ステイクスとは、賭け事における賭け金の意味があり、転じて「利害関係」を意味する。したがって、ハイ・ステイクスな評価とは、被評価者にとって利害関係の大きい評価のことであ

る。大学にとっての利害関係といえば、図で示したように保護者であり、ステークホルダーでくくった諸機関や第三者機関だろう。それらに評価されることにより、志願者の増、予算配分など資源の獲得、採用や昇進など人事や偏差値に代表される格付けの評価などにつながる。ゆえに、ハイ・ステイクスな評価は被評価者にとって大きな重圧となり、ともすれば、結果的に建学の精神や教育目標との整合性を欠き、妥当性が失われる評価となる危険性があると田中は指摘している。

(2) 目標と評価は表裏一体

田中は、「到達度評価」の性質について次のようにまとめている⁹⁾。

- ① 到達度評価の第一の特徴は、目標論と評価論を表裏の関係として捉えた点：到達度評価では、子どもたちに教える価値のある到達目標が設定され、その目標を基準として初めて評価が可能になる。到達目標は、具体的に示される。
- ② 到達目標は、厳しく吟味されたうえで設定される。
- ③ 到達目標は、子どもの学習権保障のために設定するので、目標に到達できなかった場合に、子どもに原因を押し付けるのではなく、子どもの学びの事実にして教育実践を見直す。
- ④ 到達目標は、「形成的評価」とつながる。

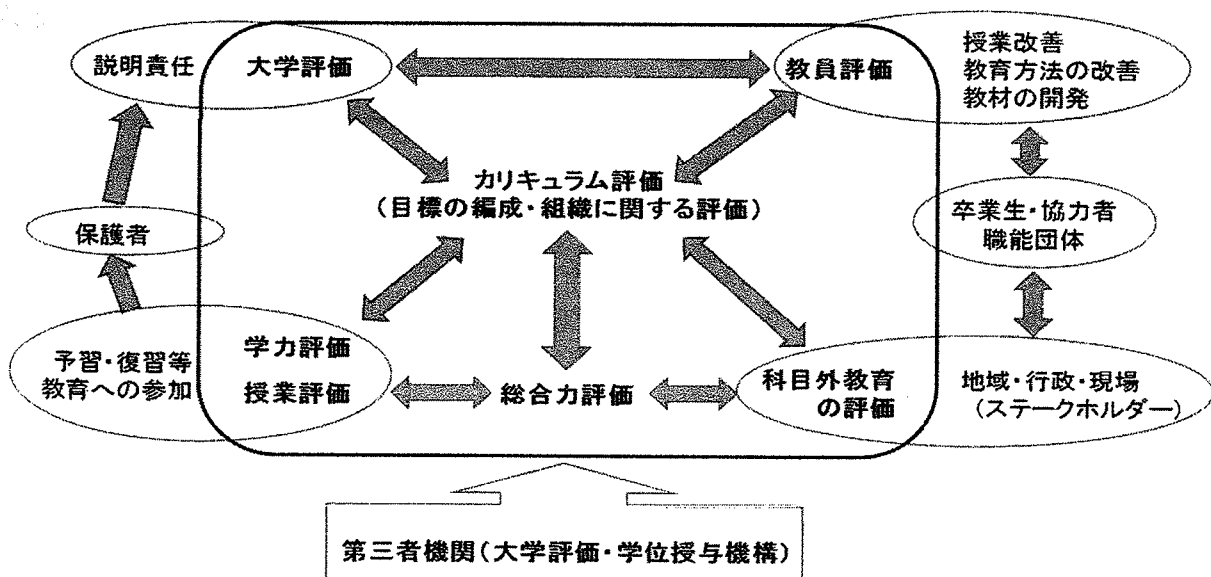


図1 教育評価の対象と構造

出典：田中耕治『教育評価』岩波書店、2008 を参考に筆者が作成

⑤ 到達度評価は、学校における教育課程編成の方法原理として、従来から重視されていた自主編成だけでなく、民主編成を要求する。

上記は概ね文脈通りに素直に受け止め、大学教育に読み替えて頂ければよいだろう。その上で、「民主編成」と「自主編成」については留意しておきたい。すなわち、田中は民主編成と自主編成は、相互に影響しあい、よりよく改善される関係がめざされるものであると指摘している。自主編成とは、各教師や学級が工夫して、子どもたちの条件に適した授業づくりを行うことであり、民主編成とは、学校の教職員集団の民主的な合意に基づいて到達目標づくりを行うことと解説されている。最高学府としての大学においても「一教員一ゼミ」をよくするという取り組みではなく、全学部・全学科・専攻の学生たちに確かな学びを保障する必要があることが全関係教員間で自覚され、学部・学科・専攻全体の改革へと展開されることは構造的に期待されていると考えられる。「教育評価の改革は、学校内の改革にとどまらず、評価制度の改革、入試制度の改革、教育システムや社会システムの改革も射程にする。」というように「評価」の観点をマクロ化すれば、学部・学科・専攻のみならず大学全体の存在意義にもつながる学校システム論の提示にもなる。

IV. 関連領域における教育評価

私立大学情報教育協会(2012)は、「大学教育への提言 未知の時代を切り拓く教育とICT活用」で、様々な学問領域の評価指標(到達目標、コア・カリキュラムのイメージ、到達度及びその測定方法)などを示している。社会福祉学分野におけるそれを抜粋すると末尾資料のとおりである。また、看護・医療の領域での特徴的な動向を以下で取り上げる。

(1)看護学教育の評価

田島(2009)は、看護学教育の基本的視点を次のようにまとめている(下線:筆者)¹⁰。

- ① 看護及び教育は、目前の対象となる人々との直接的な関わりの過程で成り立つものである。
- ② 看護学教育は、教育制度や教育課程の改正、教育内容に関わる微細な基準・規準の作成では看

護の質を高める成果は望めない。それに先立ち、看護と看護学教育の目的の明確化と教育担当者の看護実践能力の育成が不可欠である。

③ 看護学の教育を期待する看護の実践能力育成につなげるには、すべての教育の過程で既修(習)内容を組み入れた関連内容の統合・総合化と、それらの活用方法への動機づけをはからなければならない。

④ 看護の教育の過程では、最小限の基本とその多様な活用方法に基づく発展的な想像・創造力の育成が不可欠である。

⑤ 生涯学修が必要な看護専門職者の教育では、確実な基礎教育を行い、継続教育の充実・発展の素地づくりを行う必要がある。

⑥ 看護専門職者としての発展を望むには、基準や規準、指示待ちではなく、自ら活動できる主体性・自主性をすべての学修過程に並行して取り入れる必要がある。

⑦ 看護学教育の評価には、教育・指導者の看護実践能力による教育とその過程における評価する目が重要な意味を持つ。

また田島は看護実践能力の向上は、次のような構造を有するという(下線:筆者)。

① 看護は現場で人と人とのかかわりのなかで生まれるものである

② 看護は形で規制されるものではなく看護職者・患者・クライアント、その他の人々との間で創造し実践されるものであること

③ 看護計画立案及び看護診断の前に、人と直接的な関係の中でのヘルスアセスメント(フィジカルアセスメントを含む)能力による人の総合的見方の強化の必要性

④ 総合・統合能力に関する評価方法の項で言及している「目標達成の過程を可視化し自信を持たせる」「思考ののほりおりを活かした関連内容の統合・判断能力の育成」「他人との協調・対応能力の育成」などから主体性・自主性が芽生え、将来への発展が導かれる教育が、その基盤におかれることを望む

これらの指摘を文脈から解釈すると田島は、看護

教育の評価が、①看護実践力の高低、②その力が将来の専門職性の発展の土台として十分か否か、を中心に考えられているという特徴があるとまとめているといえ、そうした側面からの評価が看護という実践を行う上で欠かせないことを示しているといえよう。

(2)医学教育の評価

医学教育の評価の在り方として「医学教育分野別評価基準日本版 世界医学教育連盟 (WFME) グローバルスタンダード準拠 (Basic Medical Education: Japanese Specifications WFME Global Standards for Quality Improvement)」(以下「BME」と略す。)を読み解いてみたい¹¹⁾。

そもそも BME とは何か。次のように定義されている。

WFME は、基本医学教育(日本における学部教育)の国際基準を定める。この基準は、9 領域とその下位に位置する 36 の下位領域で構成される。

領域(AREA)とは、医学教育の構造、過程及び結果(アウトカム)にまたがる全般的構成要素で以下の 9 項目である

1. 医科大学の使命と目標
2. 教育プログラム
3. 学生評価
4. 学生
5. 教員
6. 教育資源
7. プログラム評価
8. 管理運営
9. 継続的改良

スタンダードは、36 の下位領域ごとの達成度を 2 段階で区分し、「基本的水準」と「質的向上のための水準」が設けられている。基本的水準は「must、しなければならない」で表現されている。そして質的向上のための水準は「should、すべきである」によって表現される。この“must”と“should”の表現で関係づけられる基準を社会福祉領域においては、公益社団法人日本社会福祉士会の倫理綱領と行動規範が採用しており、専門職の行為・行動のガイドラインとして活用できるようだ。そしてそのもとに「注釈」が付されているのも同様である。

こうした基準が世界共通で医学教育の中で浸透しているとするれば、日本社会福祉士会が作成している倫理綱領や行動規範についても、われわれは教育評価のガイドラインとしてもっと尊重してもよいのではないだろうか。

〔引用文献〕

- 1) 関 正夫「教育評価の原理と方法に関する一考察 - 日本の大学教育の自己改革を試行する観点から -」『広島大学大学教育研究センター大学論集』20、1-31、1991
- 2) 前田富祺編『日本語源大辞典』2005
- 3) 海原 徹『教育学 歴史・理論・課題』ミネルヴァ書房、1987
- 4) ベスタロッチ/鯨坂二夫訳『ゲルトルートは如何にしてその子等を教うるか』玉川大学出版会、37、1952
- 5) E. デュルケイム/佐々木交賢訳『教育と社会学』誠信書房、49-50、1982
- 6) R. W. タイラー/金子孫市監訳『現代カリキュラム研究の基礎』日本教育経営協会、1978
- 7) 田中耕治編『よくわかる教育評価第 2 版』ミネルヴァ書房、6-7、2010
- 8) 同上、188-189
- 9) 同上、210-211
- 10) 田島桂子『看護学教育評価の基礎と実際第 2 版』医学書院、2009
- 11) 医学教育分野別評価基準日本版 世界医学教育連盟 (WFME) グローバルスタンダード準拠 (Basic Medical Education: Japanese Specifications WFME Global Standards for Quality Improvement) , 2013

〔資料〕

- 私立大学情報教育協会 (2012)
「大学教育への提言 未知の時代を切り拓く教育と ICT 活用」(抜粋)

社会福祉学分野

社会福祉学は、人権尊重と社会正義の理念に基づき、人間らしい生活の獲得と生活の質の向上を目指し、人と社会環境の間に生じた貧困・差別・虐待などの生活問題の解決、自立のための支援方法の開発、施策の研究を通じて共生社会の実現に貢献すること

を使命とする。

現代社会は、超少子高齢社会が進展する中、社会経済の衰退化、貧困層の拡大化、地域社会のつながりの希薄化、社会的孤立の増大、災害被災者問題など解決すべき課題が山積している。このように顕在化している問題に加え、まだ社会的に認知されていない諸問題を発見、分析して社会に発信するとともに、具体的な対応策の提示を通じて、制度・政策に反映させていくことが期待されている。

こうした前提を踏まえ、社会福祉学教育では、歴史的変遷の中で到達した人権意識とエンパワメントの視点に立ち、人と社会との間に起こる生活問題を研究・分析できる力、それを解決するための社会資源の開発、仕組みづくり、問題を発掘する力及び連携・協働する力の修得を目指している。なお、こうした実践力を涵養するために、実習・演習教育を重視していることから、それによって得られる経験知・実践知は、福祉専門職のみならず、社会の様々な分野において広く社会に貢献するために活用することが期待されている。

現在の学士課程教育において、“社会福祉を学ぶ”ということは、「学問としての社会福祉学教育」と「社会福祉専門職養成教育」の側面がある。そこで、社会福祉学教育における学士力の到達目標として、両側面を踏まえつつ、以下の五点を考察した。

第一に人間と社会環境の視点から、現代社会の生活に関わる諸問題を把握し、社会福祉の意義と機能を理解できること、

第二に人権尊重及び社会正義の理念を確認し、社会福祉の目的・価値・倫理の概要を理解できること、

第三に相談・支援の専門職としての基本的態度を身につけ実践できること、

第四にソーシャルワークの専門的な理論と技術を活用できること、

第五に社会福祉に関する制度・政策を客観的に分析し、新たな社会資源やサービスプログラムを企画できることとした。

【到達目標】

1、人間と社会環境の視点から、現代社会の生活

に関わる諸問題を把握し、社会福祉の意義と機能を理解できる。

ここでは、人と社会環境の間で起きる諸問題によって、困難な生活を強いられる人々を支援するための知識と技術を学ばなければならない。そのためにまず、現代社会の生活に係る諸問題を人間存在の原理と歴史的背景を踏まえながら分析し、克服のために果たす社会福祉や関連領域の制度・政策を理解し、社会福祉の実践とソーシャルワークの意義が概説できることを目指す。

【コア・カリキュラムのイメージ】

社会福祉原論、社会福祉の歴史、社会福祉財政論、社会福祉制度論、現代社会と社会福祉等

【到達度】

①人間という存在と家族、集団、地域、制度など社会環境について概説できる。

②差別、貧困、家族関係、虐待・暴力、疾病、就労など現代社会における諸問題の発生要因・歴史的背景・実態について概説できる。

③現代社会における諸問題と関連付けて、社会福祉の目的・機能を具体的な事例に合わせて概説できる。

④社会福祉制度・政策及び関連施策などについて概説できる。

【測定方法】

①～④は、社会福祉の意義と機能の観点から、講義、演習におけるレポート、筆記試験などにより確認する。